

---

# 早く起きた朝は.....

ぞろ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

早く起きた朝は……

### 【NZマーク】

N68990

### 【作者名】

ぞる

### 【あらすじ】

珍しく朝早く起きた主人公とクラスメートの女生徒が、他に誰もいない教室で繰り広げるバカなやりとり。

朝、珍しく早く起きた。

「6時？ またまたー、そりやつて俺を騙そりつてんでしょう？」  
と、田覚まし時計と小粋なトークをしてみたが、相手が何も喋らないのでやめた。

まったく、シャイな奴だ。

それにしてもなぜ、こんな時間に起きたのだ？  
昨日は別に早く寝たわけでもないし。

普通こんな時間に田を見まつたら、迷わず一度寝じょりと伸びの  
だが。

そんな気が起きないくらい、すつきりと田覚めた。

「腹減ったな、飯でも食つか」

とりあえず、台所へ向かった。

「誰もいねえ」

朝飯を食つた後、ちょっと早いが制服に着替えて学校の教室に来てみた。

どうせ家にいてもやる」とないし。

暇だつたし。

誰もいなのは当たり前か。

こんな時間に学校に来る奴なんて、よほどの物好きしかいない。  
まあ、俺のことだが。

朝鍊の連中は今もグラウンドで汗水流してゐる。

「暇だな」

やることないのむ、教室に來ても同じだった。

むしろ家よりもやることない。

「暇だなー」

何して時間潰そうかと考えていた時、俺の頭に天啓のように何かが降りてきた。

「……暇？」

そうだ、暇だと思うから暇なんだ！

退屈だと思うなら、自分の力で道を切り開くべきなのではないかっ！」

そうだ、俺の辞書に退屈と言つ言葉などない！

どんな状況でも楽しむ！

それが真のエンター ティナーだ！

「ふつ、俺としたことがこんな大事なことも忘れていたとはな」教室を見回す。

俺以外誰一人としていない。

「この状況を逆手に取ればいいんだ！」

誰もいない、ということは何をやってもばれないといつこと…」  
があまり酷いことはしない。俺は紳士だからな。

「例えば、気になるあの子のつローダーの青春の味を堪能することも可能！」

また体操服でも可だ！」

「不可に決まってるだろうが――――ツ！」

スパーク、と小気味良い音と同時に頭部に激しい衝撃。  
「間抜けが。

せつかく今日は遅刻せずに来てるな、と思つたらこれが。  
まったく救いようがないな、お前は」「  
と、たつた今俺の頭を叩いた女が俺を睨みつけて言つ。

こいつはクラスメートの水地 切。

いつも竹刀を持ち歩いていて、何かと人の頭をそれで叩いてくる危険人物だ。

「だがそんな行動は愛情の裏返しで、実は俺の事が好き」

「勝手に嘘設定を作るな」「照れるなって。

俺はもちろん水地ならオーケーだ。

その証拠にお前のリコードー、体操服その他もろもろは当然確保済

「この痴れ者があツ！」

激昂した水地が竹刀を振るう。しかし。

「！？」

俺はそれを髪一重でかわしていた。

「ふふん、今日の俺はいつもの俺じゃないぜ？

朝の光で殺菌消毒され、心持ち健康になつた俺にとってお前の攻撃を避けるなど朝飯前。

いや、もう朝飯食べただけビ

「ふん、間抜けが……！」

一度まぐれで避けたくらいで、いい気になるな

もう一度竹刀を構える水地。

目がマジだ。

さつきとは殺氣が段違いだ。

だが今の俺は、そんな水地相手にも負ける気がしなかつた。

「くくく、水地。今日こそは、お前を全年齢じゃ出来ないような恥ずかしい目に合わせてやる」

水地にあわせ、俺も構えを取り集中力を高める。俺自身の神経が研ぎ澄まされていく。

チャンスは一度きり。

失敗は許されない。

一瞬でも気を抜けば命はない。

極限の緊張感。

俺にやれるのか？

本気の水地に俺が勝つことなんてできるのか？

否、やれるのかではなくやる！

それだけだッ！

「死ねッ！！」

物騒な掛け声と共に竹刀が振り下ろされる。

さつきとは速さが段違いだ。

これが本気の水地かっ！

だがッ！

「なつ！」

水地は俺が何をしようとしているかわかつたようだ。  
だがもう遅いッ！

この一撃は確かに速いが、今の俺に捕らえられない速さではない！

「見えるッ！

見えるぞッ！

この勝負もらつたああ—————ッ！」

今まさに俺の頭をぶつ叩こうとしている竹刀を、俺は両手で竹刀  
を挟むように取ろうとした！

「秘技！ 真剣白刃」

ゴン。

「あ」

失敗。

竹刀は俺の手をすかっ、とすり抜けて見事に俺の頭に直撃。

あまりに綺麗に入つてしまつたので、さつきまで盛り上がりつてた

空気が一気に冷めていくのがわかる。

攻撃した水地まで、啞然とした顔をしている。

いや、そりや無理だつて。

俺、格闘技とか何もやってない素人だし。

熊を一撃でノしたとか、町の不良50人を全員病院送りにした、  
なんて噂が絶えないような相手に勝てるかってーの。

そんなことを考えてると、段々意識が薄れていくを感じた。

ああやばいね、これは。

痛みより先に意識失うつてのは相当やばいで。

「あー……あれだ。

これは真剣じゃないぞ」

そんな水地の声を最後に、俺の意識は途切れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6899o/>

---

早く起きた朝は……

2010年11月3日19時21分発行